

芦生の森における登山者の地形学

檀 上 俊 雄*

地形というものはそもそも自然が作り出したもので、実に美しいものだ。美しいから興味がわき、どうしてできたのだろうかを考える。地形を単なるものとして見がちだが、それはわれわれの身のまわりにできたままの姿でなかなか残っていないからだ。集中豪雨の後の土砂の堆積や崩壊の現場を見ることがあっても、災害という前提で見てしまいがちで美学的にとらえることはむずかしい。登山者はその点、できたままの地形を見る機会に恵まれている。登るに従って、人工物、植林は少なくなり、自然の状態の中で、目にする地形はすべてできたままということになる。低山帯のなかで、丹波高地の北部、一般には京都北山と呼ばれる山域の由良川源流部は、西日本では数少ない原生林が残る地域である。この一帯を歩いてみると人の手のほとんど入らない状態で、河川の一連の地形形成の状況を見ることができる。ここでその一端を紹介しながら今後のフィールドワークのポイントを探ってゆきたい。

由良川源流は京都大学芦生演習林として約4200 haの広さを持ち、その半分の最源流部は人の手の入らない原生状態で100年近く保護されている。それ以前は芦生奥山と呼ばれ、木地師や炭焼きが一部を利用するだけのいわゆる雑木山であった。この芦生の森には従って

樹齢200～300年のブナやミズナラが多く残り、尾根筋にアシウスギの巨木が混生する。この一帯を含む丹波高地は、定高性を特徴とする隆起準平原である。由良川源流域の最高点は、左岸の標高959.0 mの三国岳で、右岸では939.1 mのブナノ木峠である。これらの周囲も900 m前後の山が連なる。地質的には、



写真1 由良川本流、ゴルジュの谷相。増水で運ばれた倒木は平常水位から約2 m上に引っ掛かっている。手前の土砂の堆積は以前はなかった。



写真2 由良川本流。穏やかな流れだが、流木といい土砂の堆積といい、増水時の流れの力は予想を超えるものようだ。

* 青山舎



写真 3 由良川支流。標高 600 m 付近は急斜でチャートの滝が連続する。手前の流木は増水時に運ばれたものだ。斜面は浮き石だらけで、斜面ごとずり落ちている感じだ。

チャート層が多く露出して滝や淵となっているが、広く古生層の堆積岩に被われている。

芦生にある演習林事務所へ入山届を出して、由良川沿いの森林軌道跡をたどる。灰野、赤崎の集落跡を過ぎる。これらは河岸段丘上の平坦地を利用している。終点の七瀬も同様だ。ここから、か細い登山道を伝って溯る。道はほとんど高巻きで、わずかな穏やかな流れの部分だけ川沿いとなる。淵、瀬、滝が連続し、両岸は浮き石だらけの急傾斜であり、まさに侵食が進んでいることが実感できる。左岸の三国岳から流れ出る支流の大谷には滝や瀬の間に小平坦地があり、ここにも集落があったという。支流の谷は本流ぞいの急斜面、標高 600 m 前後の緩斜面、滝の連続する急斜

面を経て、山上部の緩斜面という傾向にある。本流を溯る。蛇行が大きくなる。川沿いは陰しく道は大きく高巻き小尾根を越える。本流も支流同様に、500 m 前後のこのあたりが急流となる。次第に両岸が広がり中山の集落跡に着く。そして長治谷の集落跡を過ぎると流れは緩やかになり、埋積谷の中を清流は蛇行して流れる。最源流部は支流が放射状に広がり、尾根との比高も 200 m 前後で、樹林の高原といった雰囲気だ。そして労少なくして分水嶺に達することができる。由良川源流は、集中豪雨の後など道は山抜け、倒木、土砂の堆積で寸断され、谷相がすっかり変わってしまっていて驚くことがしばしばだ。こうしたなかであって、点在する木地師の集落跡や炭焼き窯跡は変わることなく残っている。先人の地形を見る目の確かさに敬服する。

芦生の森の地形形成というものは、構造的に作られた輪郭の上で、降雨や雪解けによる水の侵食で主に細部が刻まれ、その土砂が堆積してなされている。そこでは地質的、植生的な影響を強く受けて、軟弱な部分、むき出しの部分について繰り返し繰り返し一定の力以上が働いた時に侵食が進んでいると考えられる。つまり清流が地形を作るのではなく、時々集中豪雨、急激な雪解け、何らかの原因でできた自然のダムが決潰による土石流などで作られることが、同じ道を繰り返し歩くなかでよくわかる。

このように自然状態の中での地形形成を観察するフィールドとして、芦生の森の存在は大きい。そして研究を進めれば、人為的な影響の大きい地域と比較することが可能になり、その結果それぞれの地域の原地形の復元がよりリアルなものになるはずである。

そして地盤が安定したところに樹木が生育し、成長と共に広く根を張り、さらに安定させることになり、巨樹が誕生する。巨樹だけでなく、歴史的な集落跡、炭焼き窯なども安定した地形のバロメーターと言えそうだ。さらに集落を結ぶ古道は川沿いではなく、尾根上に作られている。ほとんどが利用されず廃道になっているが、それでも道跡の凹地をあ

ちこちで見かける。安定した地形の上では長い年月を経ても痕跡は残るのである。自然と人文の地理が深く結びついていることを実感できることも、この芦生の森のおもしろさであろう。

参考文献

知井村史刊行委員会『京都美山町知井村史』1998.